

### 第3章 自然再生事業(茅沼地区旧川復元)の対象となる区域の周辺 自然環境

#### 3-1 事業の対象区域

本事業の対象区域は、釧路湿原流入部となる釧路川河口から 32km 付近の標茶町内にある茅沼地区とする。右岸部は捷水路工事により上流部で合流しているオソベツ川の旧川である旧オソベツ川を含む湿原となっており、左岸部は高台を JR 線が通過しておりその周辺は農地などに利用されている。

また、当地区の右岸側は、オソベツ川の切り替えと釧路川の直線化により洪水被害を低減させることにより、土地利用を可能とするものであったが、現在まで実施に至っておらず、1987年に国立公園区域に指定され、2000年に遊水・保水機能などを考慮した河川区域に指定している。



図 3-1 茅沼地区旧川復元区域

## 3-2 事業対象区域の現状と課題

### 3-2-1 茅沼地区の現状

釧路川中流部には標茶市街が釧路川を挟んで両岸に広がっている。過去の当地区の釧路川は激しく蛇行しており、流下能力が著しく低い状況にあり出水のたび氾濫の危険にさらされてきた。当地区の本格的な改修は 1949 年度から工事に着手し 1959 年度までに標茶市街周辺を重点的に施工してきたが、その下流部の改修が未着手であり 1960 年には釧路管内全域で甚大な被害を及ぼす洪水が発生するなど早急な整備が望まれた。

また、オソベツ川は農業計画と併行して、河川改修事業が進行中であり、釧路川と同様に上流部の洪水被害を軽減させるとともに、地下水位を低下させ農業基盤整備事業の効果を上げる必要があった。

これらの必要性を受けて、合流点下流の流下能力向上及び地下水位の低下を目的として沼幌（茅沼）新水路事業計画が策定された。新水路事業は、オソベツ川合流点から下流約 5km の区間を対象に 1973 年に着工され、1980 年に暫定通水、その後、新水路区間の河道拡幅を行い、1984 年に完了した。

現在の旧川は切り替え後、約 25 年が経過し、土砂堆積や腐葉土等の堆積により川幅と河積の減少が見られる。釧路川（沼幌新水路）（以下「直線河道」という。）は、単列砂州が発生し、一部で砂州上に樹木の繁茂が見られる。また、旧川と直線河道の間には排水路が整備され排水性の向上、地下水位の低下により乾燥化が促進された。

旧川周辺には、牧草地跡が広く分布しているほか、ヨシ群落やハルニレ林等の自然植生も分布している。旧川は水流が緩慢なため水生植物やトゲウオ類も多数生息している。一方、直線河道右岸には新水路工事の排泥地跡があり、下流側にはヨシやスゲが生育する湿地、上流側には裸地が多く見られる。直線河道ではウグイ類やサケ科魚類が確認されている。また、旧川、直線河道ともにタンチョウの足跡が見られ、餌場となっていることがうかがえる。



写真 3-1 新水路工事中（1976 年撮影）



写真 3-2 直線河道（2003 年撮影）



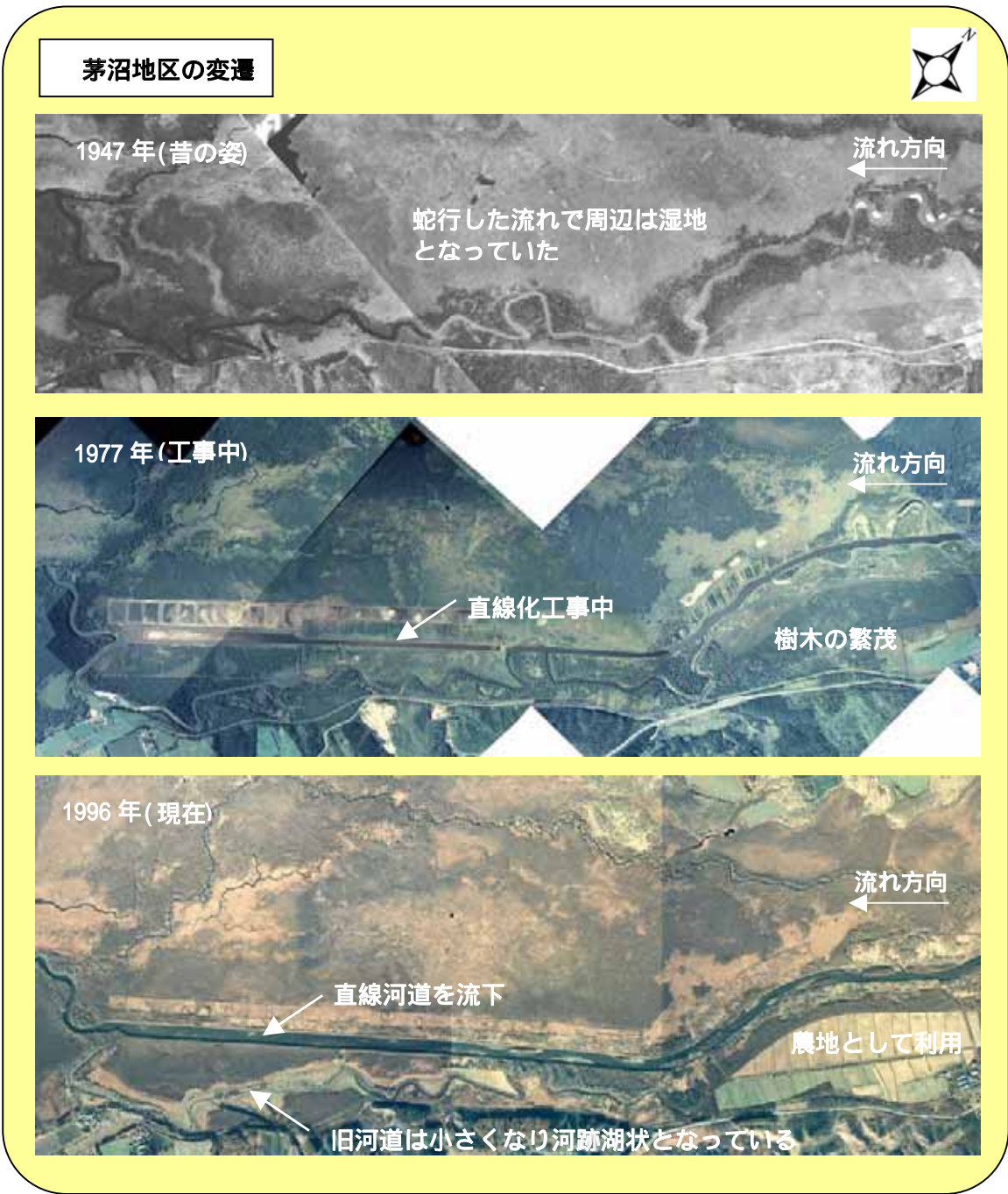
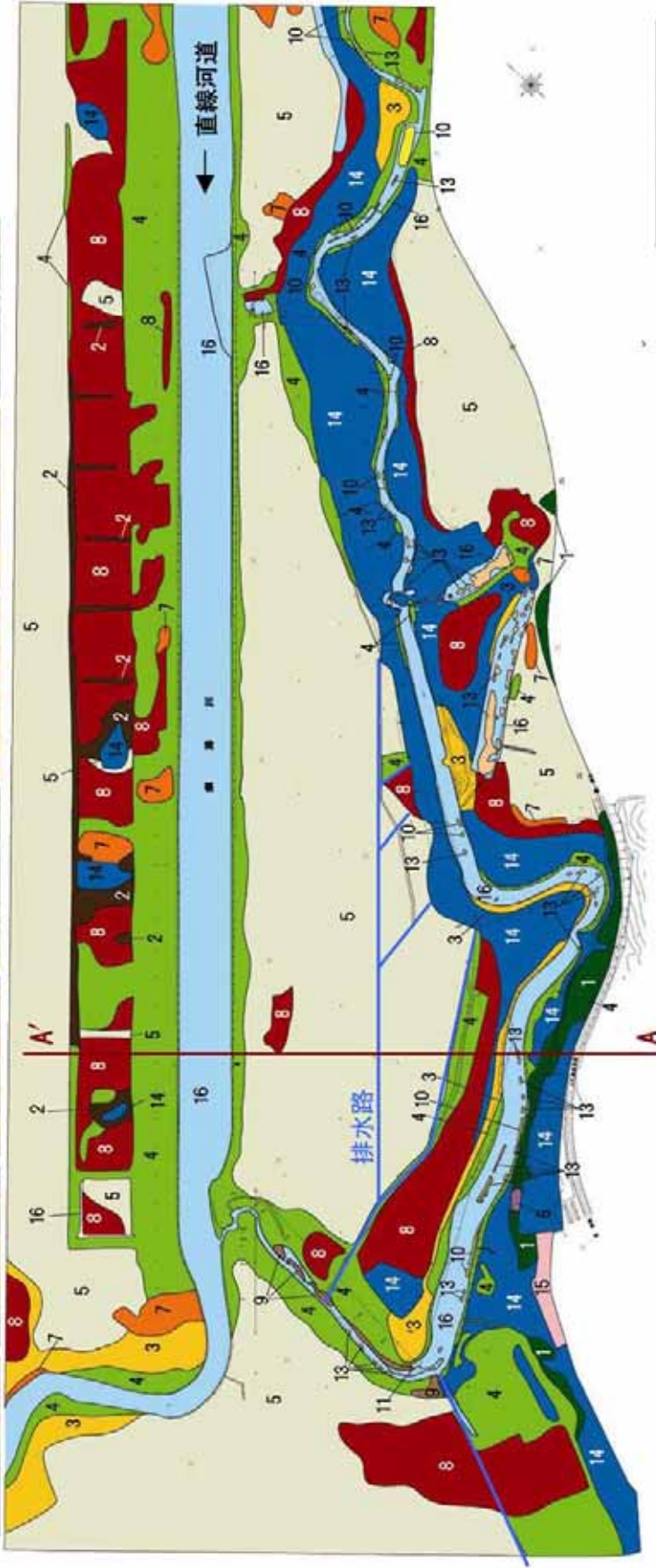
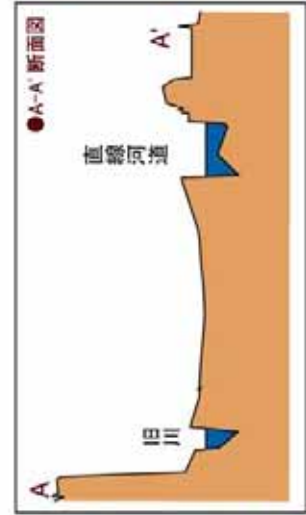


図 3-2 茅沼地区の変遷

●対象区域の環境



●対象区域の主な植物



●対象区域の主な動物



植物	動物
① ミスナ	① スナ
② シラカシ	② ハ
③ ハルニレ	③ ヤチ
④ ヤナギ	④ 群
⑤ ハシ	⑤ ノ
⑥ カラマツ	⑥ 工
⑦ ホソキ	⑦ シ
⑧ ヨシ	⑧ 群
⑨ クサ	⑨ シ
⑩ ス	⑩ 群
⑪ 河原	⑪ 群
⑫ ササ	⑫ 群
⑬ 水生	⑬ 群
⑭ 牧	⑭ 地
⑮ 雑	⑮ 地
⑯ 開	⑯ 水

図 3-3 茅沼地区の自然環境情報

出典：2002年 沼幌地区環境調査業務（1999年調査）

### 3-2-2 茅沼地区の課題

釧路川流域の土地利用が高度に進む以前の湿原上流部の自然河川では、蛇行した流路を溢れた洪水が、河岸に形成された後背湿地を潤すことにより、自然の更新システムが成立していた。その後、地域の開発と発展要請と相まって、河川改修が実施され、豊かな生活・生産基盤が形成される一方、河川環境に大きな変化を及ぼした。

釧路川茅沼地区においても1980年に河道が直線化され、周辺のヨシ群落などの湿原植生がハンノキ林に変遷し、旧川周辺は乾燥化の進捗に伴い、牧草地として土地利用されてきた。

その結果、旧川の川幅よりも広い直線化された河道内ではイトウなどの湿原特有の希少な魚類の生息の場が減少するなど、湿原内の河川とは様相の異なる河川環境が形成されるとともに、洪水時には直接湿原中心部に土砂を運搬・堆積させ、大きな負荷をかけている。

また、かつての大きく蛇行した雄大な景観は見られなくなり、直線的な単純な景観となっている。

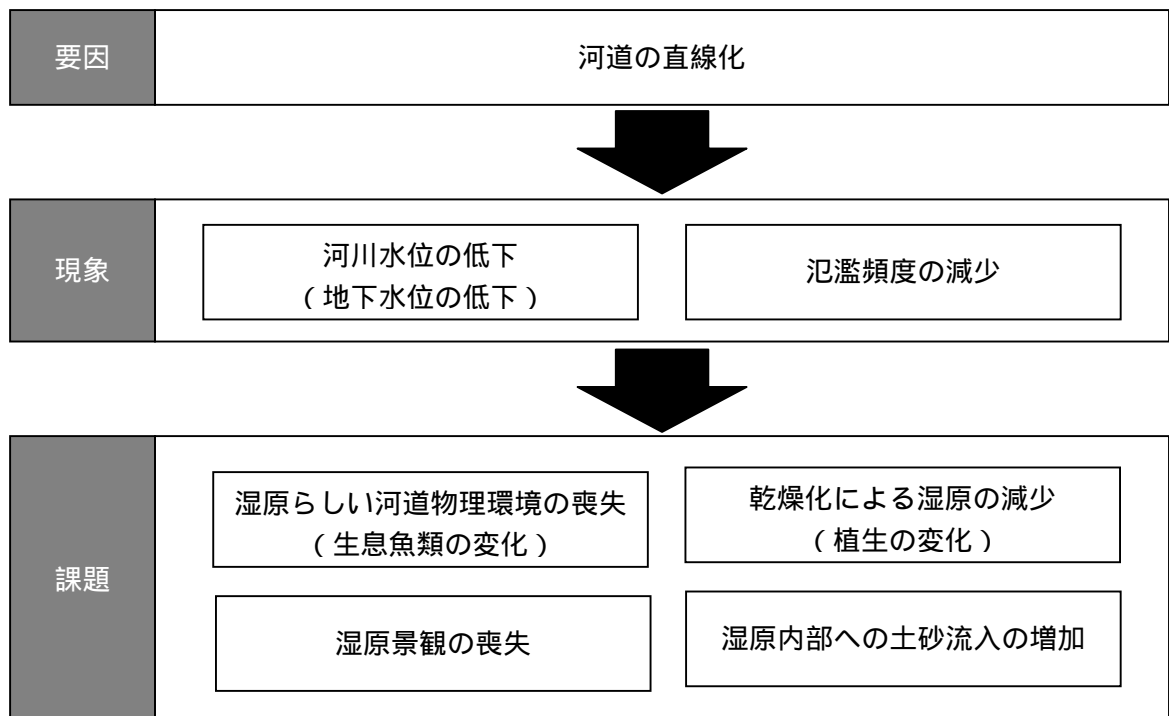


図 3-4 茅沼地区の課題